



けやき通信

Cooperative Faculty of Education, Gunma University News. "Keyaki"

第16号 (2026年3月)

糊の役割

群馬大学共同教育学部長 藤森 健太郎

中国古代の有名な歴史書『史記』に、こんな話が載っています。

漢帝国の初代皇帝劉邦の配下の将軍韓信が主君に「劉邦様は10万くらいの兵を率いるくらいの能力、一方私は多ければ多いほどいい」と言い放ちます。「じゃあなんでお前は私に仕えているのだ」と聞かれた韓信は「劉邦様は将軍として兵を率いるのはたいしたことないが、将軍を率いることができるところが希有だ」と答えるのです。これが「將に將たる」という言葉の語源ですが、例によりどこまで史実かはわかりません。しかし長年古典として親しまれてきただけにいろいろ考えるきっかけになります。

今の時代に君主やら将軍やらを持ち出すのは勘違いも甚だしいでしょうが、ひとつひとつの「現場」をマネジメントすることと現場同士の調整をとりまとめることを分別して考えるのは今もって有益なのではないかと思えます。この群馬大学共同教育学部の関連でも、学部本体の中にもまた諸専攻（講座）があり、さらに教育学研究科（厳密には学部とは別組織ですが密接な関わりがあります）、附属教育実践センター、そして附属学校園等々がありまして、各現場はそれぞれのリーダーシップのもとで精力的に活動しています。問題は、これら諸現場をきちんとまとめ、分業や連携のあり方を明確にすることで、それには、それぞれの現場のリーダーシップを取るのとはまた違った視点や方法が必要に思えます。

今の群馬大学共同教育学部関連諸組織では、研究科や実践センター、附属学校部も合議体を有する運営組織を持っていますが、相互に常に連絡を密にして齟齬なく動いており、最終的には学部全体の運営会議に諸現場の代表者が集まって教授会で議題になるような重要課題について議論・整理をすることによって、諸現場が有機的に連動した運営ができるようにしています。各現場のリー

ダーの方たちは、学部全体の運営にもそれぞれの代表として関わり、相互調整の方面でも能力を発揮していただいています。

さて『史記』の記事からは、もうひとつの示唆を読み取れると見えます。それぞれの現場において

は何といてもそこを知り尽くした方たちが最強なのであって、組織形式上それらをまとめる立場でも、個々の仕事について現場精鋭に勝てるわけではなく、張り合う必要もないということです。それぞれの事柄についてははるかに有能な専門家に支えられた諸現場の相互調整、いわば「糊」の役割が全体の執行部の本分と心得、組織全体の意図をきちんと伝えるという前提の上で、安心して現場の自主性にお任せし、過度の口出しを避けることこそ肝要ではないでしょうか。なにしろ最強の将軍は現場にいるのです。そうすればこそ、現場からの報告も率直で風通しよいものになろうかと思えます。

自主性・自立性を持っていきいきと動いている現場を邪魔することなく、最強の人たち・組織を組み合わせるどのように全体を強化していくか、学部内での話をしすぎてしまいました。しかし実は、これから来る少子化の時代、地域の教育界でも、それぞれの現場で閉じて運営することの限界が見えてくると予想しております。それぞれの運営組織は多層的にしっかり構築されていると思うのですが、それら相互の間にも、課題をともし見立て、資源を持ち寄り、対応を探るための相互調整の「糊」が何重にも必要であろうかと思っております。

地域教育界をリードしていく皆様方の中で、私たちが地域の教育界が形づくる相互調整・共栄の輪の中に当事者の一員として関わらせていただく存在でありたいと願っている次第です。



「教職大学院の研究・実践が、ぐんまの教師力を高める」

専門職学位課程長 音山 若穂

11月16日(日)、シンポジウム「ぐんまの教師力を高める2025」が荒牧キャンパスで開催されました。これは教職大学院の研究・実践成果を県内外の教師はじめ教育関係者に広く知ってもらうことで、授業づくりや学校づくりに役立ててもらうことを願って、毎年行われているものです。

始めに主催の「国立大学法人群馬大学と群馬県教育委員会との連携に係る協議会」を代表して、飯島睦美群馬大学理事・副学長より挨拶があり、続いて話題提供がありました。提供者は、令和5年度に授業実践開発コースを修了した金井亨平さん(群馬大学共同教育学部附属中学校教諭)です。テーマは2つ。1つ目は「思考力、判断力、表現力等の育成を目指した小学校体育科における授業づくり—映像視聴による話し合いの深まりとパフォーマンスに注目して—」と題して、大学院在籍当時の勤務校であった下仁田町立下仁田小学校で行われた授業の実践が紹介されました。

この実践は必修科目である「授業実践課題研究」として行われたものです。大学院での研究というと研究成果を論文にまとめ公表することを目指しますが、教職大学院では、学生自身や勤務校の教育実践上の課題をとらえ、まずは実践を通してそれらの課題を解決することを目指します。金井さんは勤務校での課題を踏まえ、体育科ボール運動「ゴール型」に視点を当て、タブレット端末を用いた動画視聴を授業外に位置付けることで、児童の思考力、判断力、表現力等の向上を図るための授業づくりを提案することを目的としました。

金井さんは当時6年生を対象として9～10月にかけて行った授業について、具体的に授業の内容と工夫した点を紹介していきます。これは学術研究で言えば「方法」に相当するものですが、課題研究ではとりわけ大切な、報告の「核」となる部分です。この発表を聞いている他

の教師にとっては、どのように自分の授業に活用することができるか頭を働かせながら聞いているのであり、実践の内容こそ最大の関心事であると言えます。金井先生もその点をよく心得ていて、当時収録した授業の動画視聴も交えながら、授業を行った教師目線で丁寧に、詳しく説明をしていました。

また、「研究」というとよく現場の教師から聞かれるのは、「検証はどうしたらいいのかわかるのか」ということです。この点についても金井さんは丁寧にその方法を示していました。複数の検証方法を、それぞれ検証したい目的に応じて設定していること、質問紙による量的な評価だけでなく、メインゲームの様子や児童の話し合いの様子など映像記録の分析も加えていることも示されました。全体として課題研究の報告としてよいお手本となる内容で、現職の教師だけでなく、これから報告をまとめる教職大学院の学生や、教職を目指す学部生にとっても参考となる発表でした。

2つ目のテーマは「地域人材を生かした下仁田学習」と題して、金井さんが同様に勤務校で取り組んだ総合的な学習の時間の取組についての話題提供もありました。これは教職大学院の授業での課題が元になっているものです。その課題とは、附属中学校の「未来創造科」の全体計画や指導案を参考にしながら、各学校での取組を考えてくるというものでした。この課題に取り組んだことを踏まえ、金井さんは教科横断的な視点と、地域や外部との関わりを意識しながら取り組みたいと考え、「下仁田町の魅力を発信しよう」という単元で実践しました。

課題の設定場面では、町の総合計画などを参考にしながらどのような課題があるのかを児童とともに考えました。情報収集ではインターネットなどでの調べ活動の他、校外学習なども活用し実際に自分の目で確かめ体験できるように工夫しました。まとめの段階ではパンフレットを作り、町役場の方に見てもらったり、印刷会社の担当者にデザインを見てもらったりもしました。この時間を通して改めて下仁田の魅力を見つめることができたこと、児童の手ごたえも十分だったようです。

以上2つの話題提供の後、上原永次教授(共同教育学部附属教育実践センター)からのコメントと、飯塚慎也氏(群馬県教育委員会事務局義務教育課指導主事)からの指導講評がありました。フロアからの活発な質疑応答もあり、充実したシンポジウムとなりました。当日は対面とオンラインの参加を合わせて64名の参加がありました。



令和8年度採用 群馬県教員採用試験結果

学生支援委員長 木山 慶子

令和8年度採用群馬県教員採用試験の本学合格者は、現役109名、既卒者32名、合計141名という結果でした(表1参照)。表2は、令和3年度(採用)から令和8年度(採用)までの志願者数(現役生)に対する一次・二次試験合格者数と合格率を示しています。今年度の志願者数は、昨年度に比べ微増しました。合格率については、一次試験の合格率は上昇しましたが、最終的な合格率はわずかに下がった結果となりました。(なおR6年度採用分から、卒業予定者が220名→190名へと減員しています)。昨今の社会全体における教員離れ、の風潮の中で、昨年より、わずかではありますが、志願者数が増えたことは、うれしい限りです。引き続き、学生には、大学での学びを通して、教員の仕事のやりがいや魅力を理解してもらい、群馬大学から、一人でも多くの教員を輩出していきたいと考えています。そのために、本年度も学生支援委員会では、教員採用試験対策講座を実施しています。これらの講座は、毎年、学生の要望や各県の教育委員会の教員人材育成の方針を反映し、改善や工夫を加えながら、充実させています。また、同窓会のご協力による各種支援事業(面接試験の相談会・在学生への講演会など)も実施させていただいており、各回、熱心で適切な指導をいただいております。さらに、本学の教育実践センター主催での対策

講座や講演会、群馬県教育委員会と連携しての講演会や座談会も各種開催しています。学生が大学教員以外の様々な方々から、教員の魅力や使命感を感じることができる機会を数多く創っています。学生支援委員会は、今後も、学生の教員になりたい気持ちを育て、志望者・合格者を増やせるよう、多様な取り組みを進めていきます。

表1:群馬県公立学校教員採用試験の校種別結果と占有率(既卒者含む)

令和8年度採用	全体合格者数	群大合格者数			占有率	
		現役生	既卒者	合計	現役生	全体
小学校	191	27	6	33	14.1%	17.3%
中学校	179	65	12	77	36.3%	43.0%
特別支援学校	46	8	6	14	17.4%	30.4%
小計	416	100	24	124	24.0%	29.8%
高等学校	86	9	8	17	10.5%	19.8%
合計	502	109	32	141	21.7%	28.1%

表2:群馬県公立学校教員採用試験における本学志願者数(現役生)と合格率

採用年度	志願者数	一次試験合格者数 (志願者に対する合格率)	二次試験合格者数 (志願者に対する合格率)
令和8年度	139	135 (97.1%)	109 (78.4%)
令和7年度	135	125 (92.6%)	106 (78.5%)
令和6年度	124	106 (85.5%)	86 (69.4%)
令和5年度	137	118 (86.1%)	100 (73.0%)
令和4年度	150	123 (82.0%)	101 (67.3%)
令和3年度	158	138 (87.3%)	102 (64.6%)

令和7年度の授業

教務委員長 河内 昭浩

本学部は、令和2年4月に宇都宮大学との共同教育学部になりました。共同教育学部においては、相手大学の開講する授業を31単位以上修得する必要があり(大学設置基準第45条)、学生は62単位以上(31単位以上×2)の授業を、宇都宮大学の学生とともに受講しています。学生にとっての最大のメリットは、多様な専門性の高い授業を受講できることでしょう。遠隔授業システム等を用いることで、宇都宮大学の教員の授業を受けることができます。また、ICT関連の授業や環境関連の授業、手話に関する授業などから、これからの学校教員に必要な知識や技能を学べるようになりました。

一方で、上記以外はこれまで通り、対面で、群馬大学生のみで受講しています。各教科の指導法、教育実習、卒業研究等、対面での学びが欠かせない部分は、何も変わっていません。このように共同教育学部では、アナログとデジタル双方の良さを生かした授業が展開されてい

ます。こうした本学部での経験は、この先の学校教員の職務に大いに生きることでしょう。

また本学部は、令和6年4月にカリキュラム改編を行いました。従って令和7年度は、2学年までが新課程、3学年以上が旧課程での授業編成となっています。一部に授業名や単位数等の変更があり、学生の皆さんにはご負担をおかけしております。「履修手引」等をもとに、確実な履修を引き続きお願いいたします。また新課程では、卒業に要する単位数が軽減されています。新課程の皆さんは、空いた時間の使い道を意義あるものにして、将来の学校教員としての自分磨きに励んでいただければと思います。



総合的な教師教育サポート

教育実践センター長 栗原 淳一

本センターでは、本学の教育実習（A・B）の充実度と実施期間についての学生へのアンケート調査の結果を分析し、教育実習のプログラム開発を行っています。

2024年度調査において「教育実習A」と「教育実習B」について「大変充実していた」と回答した学生の割合は、それぞれ80.8%、76.4%で、2023年度と同調査に比べてそれぞれ9.2、5.3ポイント上昇しました。また、実習期間（A：5週間、B：3週間）について「適切な期間であった・ある程度適切な期間であった」と回答した学生の割合は95.1%で、2023年度に比べて4.7ポイント上昇しました。各講座において実習委員の先生方を中心にきめ細かいサポートをいただいているお陰です。実習協力校において、「教職の魅力」を実感できるようにご指導をいただいていることも大きく影響しています。また、実習を終えた全学生を対象に、新たに「教職への意欲化」を図るプログラムを事後指導に導入しま

した。県教育委員会との交流人事で本学の業務にあたっているセンターの教員が、自身の経験を踏まえつつ学生の悩みや不安に寄り添った講話を行ったことで、学生たちは「実習を終えた時点より教員になりたいと思うようになった」と回答するなど、教職の道を歩むことへの自覚や自信を深めました。

さらに、教員採用試験に向けた支援を行っています。内容は、面接方法や県教育委員会の資料やメッセージの理解を図る講義と、それを踏まえた面接練習（含：指導）です。参加者数は、毎年度増加してきており、ニーズが高まっています。また、学び続ける教師のネットワークづくりを目指して「教員研修リレー講座」を毎年度実施しています。対面開催で、2024年度は、教員志望の学生、現職教員など、延べ121名のご参加をいただきました。この講座をオンデマンドでも提供できるよう映像コンテンツを作成し、今後の公開に向けて準備を進めています。

共同教育学部でのキャンパスライフを体験できるオープンキャンパス開催

入学試験委員会広報委員長 中雄 勇人

オープンキャンパスを7月21日（月・祝）に開催しました。本年度は、共同教育学部における学びの内容について実際に体験いただけるよう教育学部の全13専攻による体験型イベントをはじめ、在校生の案内によるキャンパスツアーや、各専攻の在学生と高校生によるフリートークなどの企画を実施することができました。来場者も、高校生567名、保護者338名、延べ905名と、非常に多くの方にご来場いただき、共同教育学部のある荒牧キャンパスを見ていただくことができました。

当日は、多くの現役学生に協力いただき、実際の学生生活やキャンパスの様子について語っていただくことで、入学した際の生活がイメージできるよう様々な企画に参加いただきました。現役学生が来場者の方の緊張をほぐしながら、大学における講義や、入試に臨む準備についてなど様々な質問に、真摯に対応している姿が印象に残りました。また、来場者の中には、保護者の方と共に西日本など遠方より来場いただき、群馬大学の教育活

動に関心をお持ちいただいているとお話をいただくなど、今後も、より多くの方に共同教育学部の魅力を発信していければと考えております。

猛暑日の中お越しいただきました皆様、本当にありがとうございました。受験生の皆様の未来が、希望に満ちたものとなるようお祈りしております。



群馬大学共同教育学部ニュース「けやき通信」 第16号（2026年3月）

発行：群馬大学共同教育学部

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2 / TEL：(027) 220-7204 / URL：https://www.edu.gunma-u.ac.jp/

・本紙に関するご意見ご感想等ございましたらお寄せください。